



POINT 1

思・判・表

話の中心や構成を意識しながら考えを広げ深める授業デザイン

話すこと・聞くこと領域の指導事項において、目的に整合した言語活動を位置付けることで、必要な情報を端的に捉えながら、質問や意見など自分の考えに生かす姿につながる。

指導の効果をより一層確かなものにするためには、学びの必要感が大切な要素になると考える。必要感をもって相手の話を聞いたり、自分の考えを述べたりするためには、「相手」「目的」「場面や状況、条件」「方法」「評価」の5つの言語意識を明確にし、子ども自ら言葉と関わっていくことができるような言語活動の位置付けが重要になるだろう。言語活動とは指導事項を指導するための手段・方法の1つである。何かについてまとめる、話し合う、スピーチ、報告など、言葉を介した活動であるが、活動自体が目的になってしまう授業も少なくないと思われる。

そこで、言語意識の働きにつながるような言語活動を取り入れた実践例を紹介したい。

1 行事等と関連させた話し合い活動

曖昧な目的や、教師の一方的なテーマ設定で話し合い活動を展開するのではなく、子どもが「やってみよう!」「やらなきゃ!」となるように目的意識を明確にした活動を実践していくことが大切だと考える。

- 学級全体のために、運動会種目「○○」の作戦について話し合い、練習で試す。
- 保護者に自分たちの思いを伝えるために、学習発表会演目「○○」の成果や改善点について話し合い、本番に生かす。
- 卒業生のために、卒業を祝う会を行う意味を考え、出し物の案や方法について話し合い、計画を立てて企画を進める。

【言語意識を明確にした話し合い活動の例】

《話し合いの手順例》

- (1) テーマや目的、進め方の確認
- (2) 役割分担(司会・記録など)
- (3) 意見交流
・提案 ・意見/質問 ・反論 など
- (4) 考えの共通点や相違点の整理
- (5) まとめ・今後に向けて



●「あて」にたいするふり返り(三分間)	●決定した○○をまとめる(三分間)	●意見の共通点・その点の整理(七分間)	●仲間の「ていあん」を発表する(一分間) 仲間の「ていあん」を聞いてメモする(五分間)	●「ていあん者(自分)」自分の考えを書く(五分間)	●目的の話し合いの「きだい」のかくにん(一分)	●目的の話し合いの「あて」(二分間)	●「しかい者」() ●「記録者」()	テーマ	○○(発表・運動会種目)・○○(学習発表会種目)	班名 名前
---------------------	-------------------	---------------------	--	---------------------------	-------------------------	--------------------	----------------------	-----	--------------------------	----------

【話し合い活動のワークシート例】

これらの例は、学級会などでも活用できると考える。ただし、国語科の指導事項に結び付けることをねらいとする場合は、言語意識を子どもと共有する必要があるだろう。そうすることで、子どもは必要感をもち、相手の話を聞いて感想をもったり、質問をしたりすることができ、指導の効果を高めることにつながるだろう。

また、話し合ったことを行事などで実践する機会を繰り返し設けることで、単発的な活動ではなく、自分たちの変容を実感できるような話し合いの在り方にもつながると考える。

こなす授業デザイン

足寄町立足寄小学校 教諭 程野 純貴



小学校4学年

小学校6学年

中学校2学年

POINT 2

知・技

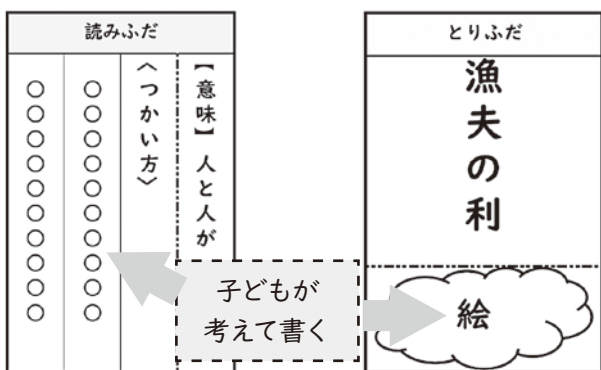
言葉に親しみをもちながら、言葉の意味理解を図る授業デザイン

我が国の言語文化に関する事項の指導において、言葉への親しみや興味・関心を高める“仕掛け”を講じることで、伝統的な言語文化に関わる意味理解が一層促される。

短歌や俳句、慣用句などの伝統的な言語文化に関わる単元が始まる際、「今日から〇〇をやっていくよ!では、覚えて音読してみよう!」「この俳句の意味は〇〇だよ!覚えてね!」などと、教師主導で授業が展開される場合もあるだろう。これでは、子どもたちが言葉に親しんだり、興味・関心を高めたりすることができなくなり、言葉の意味理解にもつながらないと考える。

そこで、伝統的な言語文化に関わる意味理解を効果的に生み出していくための“仕掛け”の例について紹介したい。

1 楽しみながら意味を知るための“仕掛け”



【故事成語かるたの例】

《単元の流れ》

- (1) 単元を見通し、学習計画を立てる。
- (2) 教科書教材を基に故事成語について知る。
- (3) 本などで故事成語を調べ、かるたで紹介したい故事成語とその理由をメモする。
- (4) かるたの下書きを交流・推敲する。
- (5) かるたを作って遊ぶ。

2 関連的な指導を意識した“仕掛け”

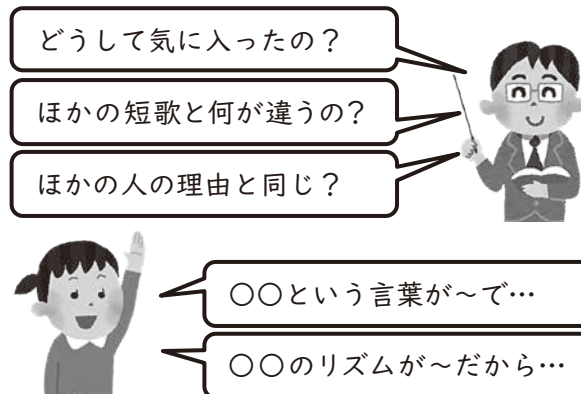
学校や子どもたちの実態に応じて指導計画を工夫すると、伝統的な言語文化と書写に関する事項を関連させて指導することもできると考える。

《単元の流れ》

- (1) 単元を見通し、学習計画を立てる。
- (2) 教科書教材の短歌を音読する。
- (3) 本などでほかの短歌を調べ、お気に入りの短歌とその理由をメモする。
- (4) 書写の時間に書く。

金色のちいさき鳥のかたちして
いちようちるなり夕日のおかに
与謝野晶子

これらの授業デザインを「知識及び技能」と結び付けるためには、以下のような発問や問い返しを行いながら、お互いの考えを個や全体で共有する必要があるだろう。互いの考えの共通点や相違点に着目して考えをまとめることで、作品のもつ言葉の響きやリズムに気付くことができると考える。





POINT 1

知・技

基礎的な学習事項の定着のための工夫

基礎的な学習事項を、様々な地理的環境の概要と合わせて考えることで知識を確実に定着したり、資料から情報を読み取りまとめる技能を身に付けたりすることができる。

4学年の社会科では、「47都道府県の名称と位置」について学習する。名称と位置のみを覚えることが主になってしまうと、ただの暗記となり、子どもたちが意欲的に学習に取り組むことができなくなってしまうと考える。また、北海道に住む子どもたちにとって、一番近い都道府県（以下「県」）は海を隔てた青森県のみである。そのほかの県はあまり身近ではないので、イメージしづらい子もいるのではないだろうか。

そこで、名称や位置だけでなく様々な地理的環境の概要を調べ、それらを組み合わせることで、子どもたちがより楽しく工夫して知識を習得できると考える。

1 県の地理的環境の概要を調べる

- (1) 調べたい県をいくつか決める。
- (2) 教科書や地図帳、書籍、インターネットなどを使って、様々な地理的環境の概要を調べる。
- (3) 調べた地理的環境の概要について、県同士の共通点や相違点に着目して整理する。

- ・ ○○地方である
- ・ ○○海に面している
- ・ ○○の生産がさかん
- ・ 新幹線が通っている
- ・ 世界遺産がある
- ・ 人口が多い、少ない
- ・ 面積が大きい、小さい
- ・ ○○県の北にある
- ・ 県庁所在地と県名が同じ
- ・ ○○川がある
- ・ となり合う都道府県の数が○つ

【都道府県の地理的環境の概要例】

2 Googleスライドを使ってクイズを作る

- (1) 作成する県を決め、出題するヒントを3つ選ぶ。
- (2) Googleスライドを使って、それぞれクイズを作成する。
- (3) 「都道府県クイズ大会」を行い、作成したクイズを出題し合う。

自分が調べ、整理した県の地理的環境の概要を使ってクイズを作成する。ヒントを選ぶときには、正解となる県が複数にならないように、また1つのヒントで答えが決まらないように指導する必要があるだろう。例えば山梨県をクイズにする場合、まず「ぶどうの生産が盛ん」というヒントにする。この時点で答えは山梨県、長野県、山形県、岡山県などに絞られる。その後のヒントで選択肢が2つ、1つになるようにしていく。また、モーション機能を使うことで、ヒントを1つずつ出すこともできる。

このように、ヒントの順番や出し方を工夫することで、ほかの県に対する理解も深められ、情報をまとめる技能も身に付くと考える。

都道府県クイズ

- ヒント①：ぶどうの生産がさかん。
- ヒント②：海に面していない。
- ヒント③：県名と県庁所在地名がちがう。

正解は・・・山梨県



【Googleスライドで作成した都道府県クイズの例】

りを多角的に考えまとめる工夫

池田町立池田小学校 教諭 松村 健史



POINT 2

思・判・表

事象のつながりを多角的に考えまとめる工夫

学習する社会的事象はそれぞれが関係し合っている。多様な立場に立ったり、視点を変えたりすることで、社会的事象の見え方が変わり、理解が深まっていく。

学習指導要領では、社会科の教科目標(2)に「社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考える力」などを養うことが示されている。社会的事象をそれぞれ個々に見るのではなく、自分自身が多様な立場に立ったり、視点を変えたりすることで、見え方の角度が変わり多角的に考えることにつながるだろう。

そこで、多角的に考えるまとめの工夫について、「自然災害から人々を守る活動」についての学習の実践例を紹介したい。

1 自助・共助・公助などについて調べる

この単元では、過去に発生した自然災害を題材として、まずどのような被害が起きたかを知り、自然災害に対してどのような準備や対策が執られてきたのかについて学習する。

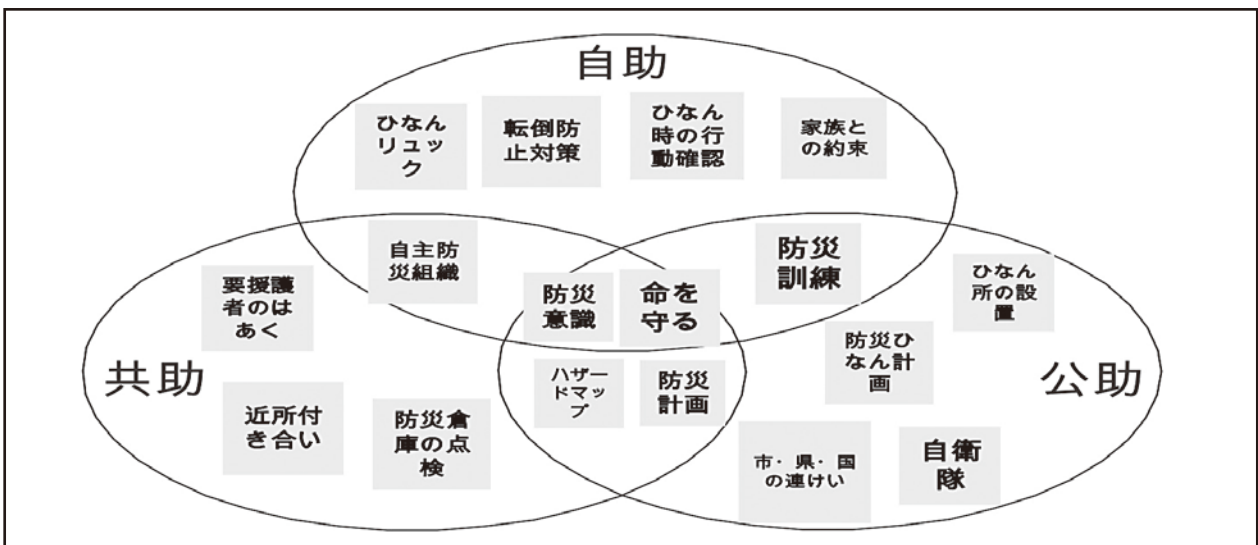
その後、災害への備えとして自分に何ができ

るか(自助)を考えたり、家や学校でインタビューをしたりする。それを地域(共助)、行政(公助)などへと少しずつ対象を広げ、本やインターネットも活用しながら調べていく。

2 Google Jamboardでベン図にまとめる

調べた備えについて、ベン図を使って多角的に考察していく。ベン図の視点の重なる部分に着目することで、市町村が住民と協力しながら防災計画を立てたり、自分自身が防災訓練に参加したりするなど、災害から人々を守る活動を多様な視点で捉えることができるだろう。

このように、関係機関の協力を多角的に考察していくことが、それぞれに共通する「防災意識」や「命を守る」という概念に気付くことにつながるのではないだろうか。



【ベン図の作成例】

POINT 1

思・判・表

考えのズレを顕在化させ、表現を引き出す工夫

学習過程を工夫することで、子ども一人一人の考えのズレを意図的に生み出し、顕在化させ、「やってみたい」「伝えたい」「聞きたい」という思いを引き出していく。

子ども一人一人の考えの違いなど（以下、ズレ）を意図的に生み出し、顕在化させることで、子どもたちはそのズレを修正したいと思うだろう。ズレを修正したい気持ちがあるからこそ、自分の考えを表現したり、友達の考えを聞いたたりしたくなると考える。

4 学年「平面図形の面積」の単元では、長方形や正方形を基にして複合図形の面積を求める学習がある。子どもの多様な表現を引き出すために、問題提示や展開の仕方に工夫を加え、ズレを顕在化させた実践を紹介したい。

1 既習の学習内容とのズレを生かし「やってみたい」を引き出す

長方形と正方形の面積の求め方を学習した後、下記のような複合図形を提示する。その際、辺の長さを示さないことで、形に着目しやすくなると考える。長方形でも正方形でもない図形であるため、既習の学習内容とのズレが生まれるだろう。このとき、子どもたちの反応は、下記の3つに分かれることが予想される。

- ① 解決の見当が付かない
- ② 何となく解決できそう
- ③ 解決の見通しがもてる



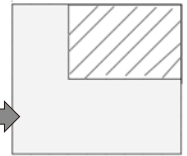
ここで、すぐに③の子に言葉で説明させることはせず、「難しいと思ってる人の気持ち分かる人？」と聞くことで、既習の学習内容とのズレを共有することができると思う。そこから、「言葉を使わずに自分の考えを表せる人？」と

問えば、手で分ける動作をしたり、提示されている図形に線を引いたりして表現する子が出てくるだろう。解釈したことを表現し合うことで、解決の見通しをもつことができ、「やってみたい」という雰囲気が教室の中に生まれると考える。

このタイミングで辺の長さを提示することにより、子どもたちはいろいろな方法で解き方を考え出すことができるだろう。

2 子ども同士の考えのズレを生かし、表現力を引き出す

- ① 図形を分けて求める
- ② 切って移動させて求める
- ③ 全体から部分を引いて求める



多くの子どもは①、②の考え方をするだろう。細かく分ける子どももいると予想される。様々な考えも認めつつ、ここでは、③の考えに焦点を当てる。子ども同士の考えのズレを取り上げることで、「伝えたい」「聞きたい」という思いを引き出すことができるだろう。

③の考えを全体で共有する際、あえて式だけを提示するなど、不足した情報を提示し、イメージをすり合わせていく機会を作る。そして、イメージをもった子どもが、分かったことを表現する。それをきっかけにして、表現の輪が広がり、学級でイメージが共有されるだろう。

このように、ズレを生かして子どもの表現を引き出すことで、学級全体の表現力が高まっていくだろう。

学びを次につなげる授業の終末の工夫

新得町立新得小学校 教諭 田山 雄太



POINT 2

知・技

適用問題などへの取組を通して、言語化した考えを次の学びに生かす工夫

授業の終末で新たな考えを言語化し、適用問題に取り組んだり、ほかの単元と関連付けたりすることで、知識として定着し、次の学びへ生かせるようになる。

引き出された表現を、授業の中で振り返る場面を設定したい。私は、授業の終末場面で言語化してまとめる時間を設けている。

前ページで紹介した「平面図形の面積」の学習で、複合図形の面積を求めるために、いろいろな方法を考え、表現したら、言語化してまとめる。言語化することで知識として身に付き、新たな問題に取り組むときに、その考えを引き出し、生かすことができるだろう。

1 言語化で身に付けた知識を次の学びへ生かす

子どもたちに、「今日解いた方法に作戦名を付けたら？」と問えば、以下のように名付けるのではないだろうか。

- ① 図形を分けて求める→「分ける作戦」
- ② 切って移動させて求める→「切って移動作戦」
- ③ 全体から部分を引いて求める
→「全体-要らない部分作戦」

子どもたちは、〇〇作戦と聞けば、短く分かりやすい言葉になるように工夫するだろう。要約化された言葉は、次の学びに生かすときに役立つと考える。ただし、言語化してまとめる前提として、いろいろな方法を考え、それぞれの考えの特徴を捉えられるような学習を日頃から積み重ねていることが重要だろう。

また、子どもたちが表現した言葉を板書に残し、参照できるようにすることで、言語化した知識を次の学びに生かすことができるだろう。

2 適用問題への取組やほかの単元との関連付けを通じて、考え方への理解を深める

言語化してまとめた後には、適用問題に取り組むことで、身に付けた知識が生かされているという実感をもたせたい。

実践した授業では、左記③の考え方のよさをさらに引き出すために、右下の図形を扱った。計算して面積を求めることよりも、どの考え方を適用するかを考えることが大事だと考え、辺の長さを示さずに提示した。選んだ根拠を共有すれば、考え方に対する理解が深まり、知識が確実に身に付くと考える。



また、言語化することにより、ほかの知識と関連付けることが容易になるだろう。例えば、「角の大きさ」の単元では、180度以上の角の大きさを求める学習がある。「180度と残りの角度に分けて足す」「360°から要らない部分を引く」という考え方と複合図形の面積の求め方との共通点を気付けるようにすれば、数学的な見方や考え方がより豊かになっていくだろう。

このように、学びを言語化し、適用問題への取組やほかの単元と関連付けることで、学びをより確かなものにし、学びを次につなげる力になると考える。そして、子どもたちが新たな問題と向き合った際に、「これまでのどの考え方が使えるのかを考える姿」や、「授業で出てきた考え方とこれまでの学びを自分たちでつなげる姿」を引き出していくことができるだろう。



POINT 1

態度

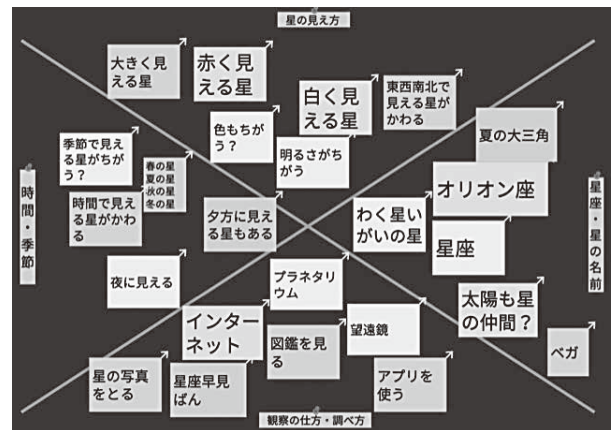
思考ツール+ICTで疑問などを共有し、問題解決への道筋を定める

思考ツールを使い、日常生活で興味・関心をもったこと、疑問に思ったことを学習に結び付け、ICTを使って共有することで、主体的に問題解決しようとする態度を養う。

日常生活のありとあらゆる場所に理科という学習の根源が隠れており、子どもたちは無意識のうちにその一部に触れている。小学校4学年の段階では、理科に対する興味・関心は高いと思うが、実際に触れた自然の事物・現象を理科の学習に結び付けることは難しいと考える。

そこで、単元の導入で日常生活の中で気付いたことや疑問に思ったことを思考ツールで表現し、更にそれをICTを使って共有することで、主体的に問題解決しようとする態度の育成を目指した実践を行った。

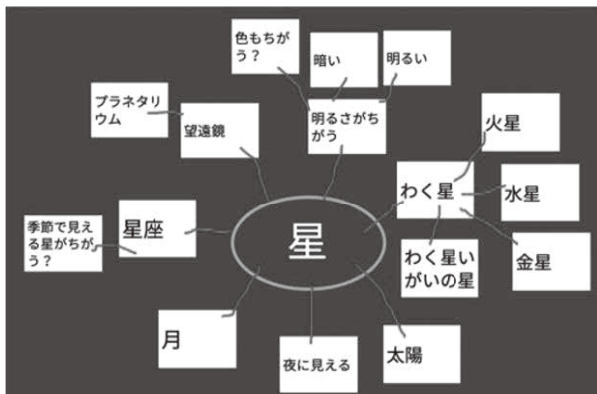
しくは全体で、ウェビングで記入した項目や疑問点をXチャートで分類し、問題を見いだす。



【Xチャートを使った分類の例】

1 ウェビングで思考を広げる

単元の導入で、学習内容に関わる自然の事物・現象をウェビングで想起させ、学習の前段階で知っていること、疑問に思ったことを書き出していく。この方法により、テーマに関わる思考を広げることができると考える。



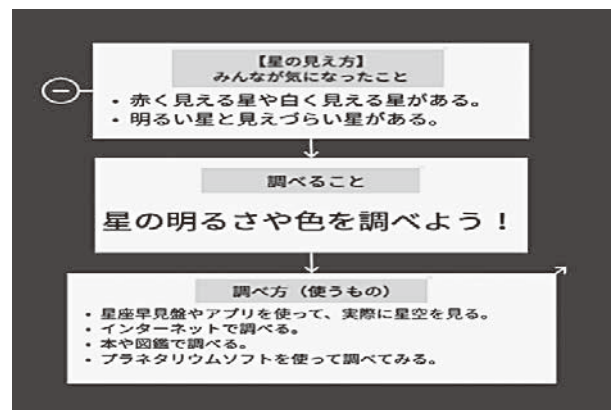
【単元導入で扱うウェビングの例】

2 Xチャートで思考进行分类する

クラウドの共有機能を活用し、小グループも

3 問題解決の方法を考え、図式化する

Xチャートの分類を基にして調べることを決め、共有機能を使って調べ方を共有する。子どもが自ら問題解決の方法を見いだすことで、理科への興味・関心を高め、観察・実験の必要感を引き出し、主体的に問題解決しようとする態度を養うことが可能になるだろう。



【問題解決の方法の図式化】

主体的に学ぶ子どもを育てる工夫

音更町立音更小学校 教諭 伊倉 大亮



小学校4学年

小学校6学年

中学校2学年

POINT 2

知・技

クラウドで共有した資料を活用し、学びを深める学習方法

観察、実験などが困難な単元において、クラウドの共有機能を活用し、より本物に近い資料を提示・活用することで、知識の習得を図る。

小学校4学年で学習する生物、天体、気象といった「B生命・地球」に関わる内容は、季節や地域特性、時間、天候に左右されるため、観察や観測が難しい学習であると考えられる。また、授業者から見ても、準備に時間と労力を要し、課題の設定にも工夫が必要だろう。

そこで、それぞれの内容でクラウドの共有機能を使って資料を提示し、観察や観測の代替、補足として活用しながら、知識を身に付ける実践を行った。

● 天体・気象に関わる図鑑

・ 天体図鑑

見られる季節、星座、太陽系の天体などに着目して検索できる。

・ 気象図鑑

雲の種類、四季などに着目して検索できる。

・ 気象データ

日本各地の天気や気温、天気図などを調べることができる。

1 Web図鑑を活用する

Google ClassroomやMicrosoft Teamsを使ってWeb図鑑のリンクを共有し、子どもがいつでも使用できるようにする。教科書会社をはじめ、様々なWeb図鑑があるため、学習内容や目的に合ったものを選択し、適宜活用する。

Web図鑑には、以下のようなものがある。

● 生物に関わる図鑑

・ 植物図鑑

花の色、花が見られる季節、寒い・暖かい場所で見られる植物などに着目して検索できる。

・ 昆虫図鑑

体の形が似ている昆虫、成虫が見られる季節、寒い・暖かい場所で見られる昆虫などに着目して検索できる。

・ 鳥の図鑑

見られる季節などに着目して検索できる。

2 プレゼンテーションソフトを活用する

GoogleスライドやMicrosoft PowerPointを活用して、Web図鑑を使いながらオリジナル図鑑を作る活動を行い、知識の習得を図っていく。教師から調べる項目を提示することで、身に付けさせたい知識を焦点化することができる。と考える。

また、一人一人のオリジナルページを追加することで、子ども自身で必要な情報をまとめることになり、主体的に学習に取り組みながら知識を身に付けることができるだろう。

星の明るさや色を調べよう(夏の大三角)

夏の大三角の写真をはろう

夏の大三角…3つの星の名前

●星座	座	●星座	座	●星座	座
●明るさ	等星	●明るさ	等星	●明るさ	等星
●色		●色		●色	

【オリジナル図鑑のテンプレート例】